

# 適性検査1

## 注 意

- 1 検査開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 問題は 

|   |
|---|
| 一 |
|---|

 問1 から 

|   |
|---|
| 四 |
|---|

 問4 まであります。
- 4 問題用紙は1ページから11ページまであります。
- 5 検査開始の指示後、すぐにページがそろっているかを確認<sup>かくにん</sup>しなさい。
- 6 解答用紙は二枚<sup>まい</sup>あります。
- 7 受検番号をそれぞれの解答用紙の決められた場所に記入しなさい。
- 8 解答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙のみ二枚とも提出しなさい。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。）

ある晴れた静かな春の日の午後でした。一人の小むすめが山でかれえだを拾っていました。

やがて、夕日が新緑のうすい木の葉をすかして赤あかと見られるころになると、小むすめは集めた小えだを小さい草原に持ち出して、そこで自分の背負<sup>せお</sup>って来たあらい目かご<sup>\*</sup>につめ始めました。

ふと、小むすめはだれかに自分がよばれたような気がしました。

「ええ？」

小むすめは思わずそういつて、起<sup>た</sup>ってその辺を見まわしましたが、そこにはだれのすがたも見えませんでした。

「わたしをよぶのはだれ？」

小むすめはもう一度大きい声でこういつて見ましたが、やはり答える者はありませんでした。

小むすめは二三度そんな気がして、初めて気がつく<sup>\*</sup>と、それは雑草の中からただ一ト本<sup>ひともと</sup>、わずかに首を差し出している小さい葉の花でした。

小むすめは頭にかぶっていた手ぬぐいで、顔のあせをふきながら、

「お前、こんな所で、よくさびしくないのね」

といいました。

「さびしいわ」

と葉の花は親しげに答えました。

「そんならなぜ来たのさ」

小むすめはしかりでもするような調子でいいました。葉の花は、「ひばりのむな毛に着いて来た種がここでこぼれたのよ。こまるわ」

と悲しげに答えました。そして、どうかわたしをお仲間の多いふもとの村へ連れて行って下さいとたのみました。

小むすめはかわいそうに思いました。小むすめは葉の花の願いをかなえてやろうと考えました。そして静かにそれを根からぬいてやりました。そしてそれを手に持って、山路<sup>やまじ</sup>を村の方へと下って行きました。

路<sup>みち</sup>にそうて清い小さな流れが、水音をたてて流れていました。しばらくすると、

「あなたの手はずいぶんほてるのね」  
と葉の花はいいました。

「あつい手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ、真ま直ぐすにしていられなくなるわ」

といって、うなだれた首を小むすめの歩調あわに合せ、力なくふつていました。

小むすめはちよつと当あわくしました。

しかし小むすめには図ずらず、いい考かんがえがうかびました。小むすめは身軽く路ばたにしゃがんで、だまつて菜の花の根を流れへひたしてやりました。

「まあ！」

菜の花は生き返つたような元気な声を出して小むすめを見上げました。

すると、小むすめは宣告せんこくするように、

「このまま流れて行くのよ」

といいました。

菜の花は不安そうに首をふりました。そして、

「先に流れてしまふとこわいわ」

といいました。

「心配しなくてもいいのよ」

そういいながら、早くも小むすめは流れの表面で、持っていた菜の花をはなしてしまいました。菜の花は、

「こわいわ、こわいわ」

と流れの水にさらわれながら、見る見る小むすめから遠くなるのをおそろしそうにさげびました。が、小むすめはだまつて両手うしろを後へまわし、せではねる目かごをおさえながら、かけて来ます。

菜の花は安心しました。そして、<sup>①</sup>さもうれしそうに水面から小むすめを見上げて、何かと話しかけるのでした。

どこからともなく気軽な黄ちようが飛んで来ました。そして、うるさく菜の花の上をついて飛んで来ました。菜の花はそれをも大変うれしがりました。<sup>②</sup>しかし黄ちようはせっかちで、<sup>\*</sup>うつり気でしたから、何時いつかまたどこかへ飛んで行ってしまいました。た。

菜の花は小むすめの鼻の頭にポツポツと玉のようなあせがかび出しているのに気がつきました。

「今度はあなたが苦しいわ」

と菜の花は心配そうにいいました。が、<sup>③</sup>小むすめはかえつて不愛想に、

「心配しなくてもいいのよ」

と答えました。

菜の花は、しかられたのかと思って、だまつてしまいました。

間もなく小むすめは菜の花の悲鳴におどろかされました。菜の花は流れに波打っているかみの毛のような水草に根をからまれて、さも苦し気に首をふっていました。

「まあ、少しそうしてお休み」

小むすめは息をはずませながら、そういつてかたわらの石にこしを下おろしました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、気持きもちが悪いわ」

菜の花はなおしきりにイヤイヤをしていました。

「それで、いいのよ」

小むすめはいいました。

「いやなの。休むのはいいけど、こうしているのは気持が悪いの。どうかちょっとあげて下さい。どうか」

と菜の花はたのみましたが、小むすめは、

「いいのよ」

と笑って取り合いません。

が、そのうち水のいきおいで菜の花の根は自然に水草から、すりぬけて行きました。そして不意に、

「流れるう！」

と大きな声をして菜の花はまた流されて行きました。

小むすめも急いで立たち上あがると、それを追ってかけ出しました。

少し来た所で、

「やはりあなたが苦しいわ」

と菜の花はコワゴワいいました。

「何でもないのよ」

と小むすめもやさしく答えて、

そうして、菜の花に気をもませまいと、わざと菜の花より二ふた三さん

間先げんをかけて行く事にしました。

ふもとの村が見えて来ました。小むすめは、

「もうすぐよ」

と声をかけました。

「そう」

と、後で菜の花が答えました。

しばらく話はたえました。ただ流れの音にまじって、パタパタ、パタパタ、と小むすめのぞうりで走る足音がきこえていました。

チャポーンという水音が小むすめの足元でしました。菜の花は死にそうな悲鳴をあげました。小むすめはおどろいて立たち止どまりました。見ると菜の花は、花も葉も色がさめたようになって、「早く早く」

とのび上っています。小むすめは急いで引き上げてやりました。

「どうしたのよ」

小むすめはそのむねに菜の花をいなくようにして、後の流れを見回しました。

「あなたの足元から何か飛びこんだの」

と菜の花はどうきがするので、言葉を切りました。

「いぼがえるなのよ。一度もぐって不意に私の顔の前にうかび上ったのよ。口のとがった意地の悪そうな、あの河童かわづのような顔に、もう少しで、わたしはほつたをぶつける所でしたわ」

といいました。

小むすめは大きな声をして笑いしました。

「笑い事じゃあ、ないわ」

と菜の花はうらめしそうにいいました。

「でも、わたしが思わず大きな声をしたら、今度はかえるの方でびっくりして、あわててもぐってしまいましたわ」

こういつて菜の花も笑いしました。

間もなく村へ着きました。

小むすめは早速自分の家の菜畑にいっしょにそれを植えてやりました。

そこは山の雑草の中とはちがって土がよくこえておりました。

菜の花はどんだんのびました。そうして、今は多勢おおぜいの仲間と仕し合せにくらす身となりました。

(志賀直哉「菜の花と小むすめ」問題のため一部改編)

〔注〕

\* 目かご…竹などで編んだ目のあらいかご。

\* 一ト本…一本のこと。

\* 当わく…どうしてよいか分からなくて、とまどうこと。

\* 図らず…思いがけず。

\* うつり気…興味の先が変わりやすいこと。

\* 二三間…「間」は長さの単位、一間は約1・8メートル。

\* 仕合せ…めぐりあわせ、幸せのこと。

### 問1

さもうれしそう 大変うれしかったです ①  
とあります  
が、この場面で「菜の花」にとつてどんなことがうれし  
いのですか。「小むすめ」と「黄ちよう」という二つの  
言葉を用いて「くがうれしい」に続くように答えなさい。

### 問2

小むすめはかえって不愛想に、③「心配しなくてもいい  
のよ」と答えました とありますが、なぜ不愛想に答え  
たのですか。「かえって」という言葉に着目して、その  
理由を「くから」に続くように答えなさい。

### 問3

④菜の花に気をもませまいと、わざと菜の花より二三間  
先をかけて行く事にしました とありますが、「二三間  
先をかけて行く」ことが、なぜ「気をもませ」ないこと  
になるのですか。その理由を解答らの言葉に続くよう  
に答えなさい。

### 問4

⑤そのむねに菜の花をいだくように について (1)、  
(2)の問いにそれぞれ答えなさい。

(1) この表現から、小むすめから菜の花に対するどのよう  
な思いが読み取れますか。漢字二字で答えなさい。

(2) (1)の解答をふまえて、あなた自身が「むねにいだ  
くように」している物事について、自らの体験を交えた  
具体例を挙げ、その理由とともに次の条件にしたがつて  
書きなさい。

#### 条件

書き出しは一まずめから書き始めなさい。

また、文章は、六十字以上七十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数えます。

このページには問題は印刷されていません。



〔二〕 次の文章Aと対談Bを読んで、後の問いに答えなさい。なお、文章Aは、将棋棋士の羽生善治さんの講演です。また、対談Bは、羽生善治さんと科学者の永田和宏さんによる対談です。問題文中では羽生善治さんの発言を「羽生」、永田和宏さんの発言を「永田」と表記しています。

（＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。）

## 文章A

「棋はアなり」という言葉があります。将棋では、相手と対局中に言葉を交わすことはほとんどありませんが、駒を動かしながら「ここまで取らせてください」「わかりました。そこまではいいでしょう」「じゃ、これもいいですか」「いや、それはちよつと欲張りでしょう。こちらも戦いますよ」というふうに盤上で話をしているようなものだ、ということなのです。

対局中は、もちろん自分の作戦や方針をいろいろ練っているわけですが、実はそれよりも大事なものは、相手が何を考えているのかを読むことです。

私（わたし）がたいへんお世話になった原田泰夫九段という大先輩は、色紙を頼まれると「三手の読み」と書いておられました。「三手の読み」とは、自分が指す、次に相手がこう来て、それに対

して自分はこう指すという三手で、最短のシミュレーションということになります。三手先を読めばいいだけですから、簡単に思われるかもしれませんが。

ところが、この「三手の読み」が実は難しい。最初の手は自分の好きなようにやればいいだけです。問題は二手目に相手が何をやってくるかです。みなさんは子どもの頃、「相手の立場に立って考えましょう」と言われた経験があると思います。が、相手の立場に立って相手の価値観で考えるということは、大人でもかなり難しい。

将棋でも、相手の立場に立って、自分の価値観で考えてしまうことがよくあります。一応、盤面をひっくり返して、相手だったらどう指すかと考えてみるんですが、つい、相手のほうから見たときに自分だったらどう指すかというふうに考えてしまう。そうすると、当然ながら相手と自分とは発想の違いがあるのです。現実の場面では、予想外の手が入ってくることがあるわけです。

その二手目の読みを間違ってしまうと、それから先、何百と読もうが何千と読もうが、結果として自分が考えている通りにはならない。非常に難しいところです。ですから、とにかく一生懸命想像する、推測する、推察する。それが、様々な物事



に挑戦ちようせんするとき、何が来ても動じないために大切な要素になるのではないかと思っています。

ある程度、リスクがとれるようになってきた、経験もそれに積たんできたという段階だんかいになっても、新しい挑戦は必要でしょう。私もいろいろなデータを見て分析ぶんせきしながら、新しいアイデアや発想が湧わいてこないかいつも考えています。

ところが最近、それがなかなかうまくいかなってきました。自分で「これはすごいいい手を思いついた、実戦の場で試ためしてみよう」と思っても、調べてみると、すでに誰かだれがそのアイデアを思いついている可能性が非常に高い。

将棋の世界も、私たちの社会と同様に情報化の波にさらされています。ですから今、新しいアイデアといっても、すでに今までにあったアイデアとアイデアを、過去に例がない組み合わせで用いている場合が多い。そういうものが、新しいアイデアということになっているようです。もちろん、既存きそんの考えを根本から覆くつがえすような発想をしようと心がけていますが、見たこともない斬新ざんしんな発想は、全体の一割いちわりにも満たないのではないかと思います。

そしてもう一つ、最近、将棋の世界で変わってきたと思うのは、以前は一人で考えて、一人で分析して、一人で研究をして

いる世界だったのが、ここ二十年くらいの間に、何人かで一緒いっしょに研究することが多くなってきた点です。

将棋は個人競技ですから、チームメイトがいるわけではない。ただし、ひとりでやっている、限界があるのも事実です。三人寄れば文殊もんじゆの知恵ちえということわざ通り、一足す二になるのではなくて、掛け算かさんになって、様々なアイデアや発想が生まれる。そこで、いかにして目標や価値観を共有できるチームやグループをつくるかということも大切になってきています。これは、将棋の世界だけではなく、どの分野にも共通している傾向けいけいではないでしょうか。

情報化社会の恩恵おんけいを受ける一方で、逆に難しくなっているのが、スタートラインに立つために必要な情報や知識がものすごく多くなっているということです。それらを記憶きおくし、習得するのに、かなりの時間を費ついやさなくてはいいけません。

もちろん、それはそれで大切なことですが、なんとかそれを習得したうえで、いざ新しいことをやろうと思うと、身に着けたものが先入観や思い込みおもひこになって、なかなか新しいものが生まれてこないという壁かべにぶつかります。

クリエティブなことをしようと思ったら、先入観を完全に頭の中から消し去るのが理想です。それが難しくても思い込み

はとりあえず脇<sup>わき</sup>に置いて、様々な可能性を排除<sup>はいじょ</sup>することなく、まっさらな状態になってどう見えるかを考える。それが、新<sup>①</sup>たなものを生み出す第一歩になるのではないでしょう。

## 対談 B

**永田** 講演の中で、原田泰夫さんが色紙に書かれる「三手の読み」という、すごく含蓄<sup>\*がんちく</sup>がある言葉を紹<sup>しょう</sup>介<sup>かい</sup>してくださいました。三手先とは、そのうちの二手は自分が指しているんですよ。で、二手目だけが相手。でも、考えてみると、棋士はその二手目に全部賭<sup>か</sup>けているということになりますね。自分の立場を離<sup>はな</sup>れて相手の気持ちになっていかないと、相手の手を読めないということなんでしょうか？

**羽生** そうですね。一つの場面で八十通りぐらいの可能性があるので、その中から相手がこう考えているんじゃないかとか、こういう手は指さないんじゃないかとか、今まで類似<sup>るいじ</sup>した場面だとかいうことをやってきたから、今回はこの手じゃないかというふうに考えていきます。

ただし、意外とお互<sup>たが</sup>い相手の手が予想できないときのほうが、熱戦とか名局といわれるものになりやすい。自分が相手の読<sup>よ</sup>み筋<sup>すじ</sup>をちゃんと予測できたときより、何を考えているかまったく

わからなくて、意外な手が続いたときのほうが、内容的にはいいものになるんです。しかも、自分の手も、感覚的に確信が持てないほうがいい手であることが多い。つまり、これはいいと思<sup>②</sup>って指す手は、相手から見ても狙<sup>ねら</sup>いがはつきりしているわけです。いいかどうか自信がないけれど、深みを持たせるために打った一手が、のちのちいい展開<sup>てんかい</sup>になるというケースはけっこう多いんです。

**永田** おもしろいなあ。でも、あまりにも考えすぎて悪い手になるということもあるんでしょうか。

**羽生** ありますね。例えば二択<sup>にたく</sup>で散々迷ってしばらくすると、そうじゃなくてこっちのほうがいいんじゃないかと三番目の手を思いつくときがあるんです。でも、それはだいたい悪い手のことが多い。

**永田** えっ、悪い手なんですか（笑）。

**羽生** そうなんです。その状態が苦しいから、そこから逃<sup>のが</sup>れるために他の手がよさそうに思えてしまうんですね。

**永田** われわれ人間は誰でも、ほんとうに迷ったときは視界<sup>しかい</sup>が狭<sup>せま</sup>くなってしまう。ちょっと別の視点から見ると、全然違う出口があるのに、その出口が見つからないということがよくありますよね。そう考えると、二択のときに、別の視点から見

第三の手を見つけるといいうのも、大事なことだと思っんですが。

羽生 そうですね。科学の偉大な発見なんかも、そういうモヤモヤとした状態の中から、ブレイクスルーが生まれてくるっていうこともありますね。

永田 科学の世界でも一番怖いのは常識にとらわれることです。これまでわかつている知識の中だけでもを考えていると、そこからはみ出したものは、絶対その思考の中に入ってこない。可能性としてはあるのに、その可能性を検証する前に、なんとなく消去してしまう。これが怖いところですね。それからどんなふうにも別の考え方へ飛躍できるかは、大事な点だと思います。

(やまなかしんや 山中伸弥 羽生善治 是枝裕和 山極壽一 永田和宏「僕たちが何者でもなかった頃の話しよう」問題のため一部改編)

〔注〕

\*棋…将棋のこと。

\*対局…将棋の対戦を行うこと。

\*三手…将棋では、駒を一回動かすことを「一手指す」という。つまり「三手」とは、自分が駒を動かし、次に相手が駒を動かし、再び自分が駒を動かすというように自分と相手とで合計三回駒を動かすこと。

\*リスク…危険。結果を予測できる度合い。

\*含蓄…表面に現れない深い意味、内容。

\*ブレイクスルー…進歩、前進。ここでは、手がかりやきっかけのこと。

問1

本文中の空らん **ア** にあてはまる適切な言葉を次の語群から一つ選びなさい。また、その言葉を選んだ理由を解答らんに合わせて答えなさい。

語群 一 言葉 挑戦 対話 思いやり 勝負 一

問2

① 新たなものを生み出す第一歩 とありますが、それを難しくしてしまうことは何ですか。対談Bから十字でぬき出して答えなさい。

問3

② 相手から見ても狙い<sup>ねらい</sup>がはっきりしている とありますが、どうしてそのようなことになってしまうのですか。その理由として考えられることを解答らんに合わせて答えなさい。

問4

文章Aの中に 三人寄れば文殊<sup>もんじゆ</sup>の知恵<sup>ちえ</sup> とありますが、本文中で羽生さんは「三人寄れば文殊の知恵」をどのようなことと考えていますか。また、それをふまえてあなたの「三人寄れば文殊の知恵」にあてはまるできごとを、次の条件にしたがって書きなさい。

条件1 段落構成<sup>だんらく</sup>については、次の①から③にしたがうこと。

① 二段落構成で、内容のまとめりやつながりを考えて書きなさい。

② 第一段落では、本文で用いられている「三人寄れば文殊の知恵」ということわざについて、どのようなものと述べていますか。その部分を要約しなさい。

③ 第二段落では、羽生さんの考えをふまえて、自らの体験を書きなさい。

条件2 解答は原稿用紙<sup>げんこう</sup>の正しい使い方<sup>けいり</sup>で書き、書き出しは1

ます空けて書き始めなさい。

また、文章は、二百字以上二百四十文字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数え、改行などで空いた  
ますも字数に数えます。

